
知恵の樹の下にて

由愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知恵の樹の下にて

【Zコード】

Z5666V

【作者名】

由愛

【あらすじ】

小さな手のひらに唇寄せて
小さな証を契りましょう。

禁断の果実を口にした人間は、罪深き人間として深淵の裁判所へと送られる。

そこには、赤目の鬼がいると、誰かが言った。

この時間が過ぎるのは世界で、あの時こうしていればよかつたなどと後悔しても、どうにもならない。

それでも、俺は漆黒の彼女を見る度に考へてしまう。本当に、どうにもできなかつたのだろうか、と。

いつから狂つたのだろう。少なくともあの時までは絶対に自分は普通の中学生だつたはずだ。とにかく走ることが大好きで、当然部活も大好きで、勉強は少し苦手。特に田立つことの無い、どこの中学校にもいそうな平凡な男子。

普通に好きな女の子もいて、卒業するまでに告白をするか否とかいうことも真剣に考えていたし、そもそもそんなことしか考えていなかつた気がする。しかし、あの時あの瞬間、俺の人生の歯車は逆回転してしまつた。

だからといって、狂つたことに今更文句は言いづらい。もし狂わなかつたら彼女に会えることは無かつたのだし、こんな経験すらできなかつた。でも、でも

やりきれない何かが、胸をよぎる。

そんなことをうだうだと考へてゐるうちに、運命の時間はやつてくる。

不協和音が、世界を包む。裁きの時間だ。

さあ。

存分に喚き存分に暴れ、人間という人間の素晴らしさをあの化け

物どもに教えてやるつ。
ひたすらに白い世界で俺は、他人の為に自分を捨てるのことを、決
めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5666v/>

知恵の樹の下にて

2011年10月9日02時44分発行